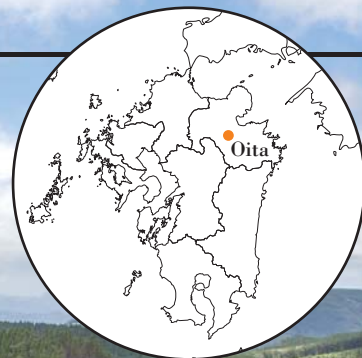


From大分



「観光の創造」へ夢を結ぶ 九重“夢”大吊橋

観光を産業の大きな柱とする大分県玖珠郡九重町。町を挙げて建設した「九重“夢”大吊橋」はオープンと同時に爆発的な人気を呼び、人の流れを変えて九州を代表する観光スポットとなった。その魅力とは、そして建設に至った経緯とは。日本一の大吊橋のドラマを訪ねよう。

24日間で1年の客数をクリア
人気も「日本一」の大吊橋

上／大吊橋の全貌。支柱間が390mあり、2本のメインケーブルが構造を支える



周辺は紅葉の名所で秋は観光客が押し寄せる。滝は左が雌滝、右が雄滝(震動の滝)



九州とはいえ、くじゅう連山に続く高地にあり、冬には雪景色になることも

なんというスケール、なんという眺望だろう。話にも聞き写真も見ていたが、九重“夢”大吊橋の素晴らしさは、実際に現地に来て橋を渡ってみないとわからない。足を進めるにつれ、奥まで見えてくる渓谷の険しさ美しさ、山肌を流れ落ちる、日本の滝百選にも選ばれた震動の滝、遠く連なる山々の雄大さ、目もくらむような橋の高さ。驚嘆の声を上げずにはいられない。

橋のある九重町は、大分県の北西部にあり、九州の最高峰くじゅう連山を望む地だ。町土の半分が国立公園・国定公園内にあり、豊かな自然と景観に恵まれ、筋湯や湯坪、壁湯、釜ノ口など12の温泉を擁する。橋は玖珠川の支流・鳴子川の深い渓谷に架かり、周辺は紅葉百選に選ばれた九酔溪きゅうすいけいもある紅

葉の名所だ。下を流れる鳴子川からの高さは173m、橋の長さは390m。完成当時は高さ・長さ共に人が渡る専用の吊橋としては日本一を誇った。「後に静岡に長さ400mの箱根西麓・三島大吊橋ができましたが、高さでは今も日本一。『日本一』の看板は下ろしていません」と九重“夢”大吊橋管理センターの生田良治さんという。

オープンしたのは2006年10月30日。紅葉の時期だったこともあって、予想をはるかに超える入場客があり、わずか9日間で10万人を突破。24日間で1年の入場者見込みである30万人をクリアするという好調な滑り出しとなった。その後も2007年4月10日に100万人、昨年3月1日には入場者数1,000万人を超えている。最初の頃より客足は落ち着いてきたが、それでも年間60万人。見込みの倍の入場者数を保っている。

「自律のまち」が育んだ
壮大な夢のプラン

九重“夢”大吊橋は町が建設し、運営する町営施設で、完全な観光用。500円の料金も、通行料ではなく入場料だ。最終的には建設費20億円という巨費を投じ町が建設を果すまでには、様々な曲折があったという。

「滝も紅葉もきれいに見えるから、渓谷に吊橋を架けたらどうだろう」という声自体は、かなり古く、50年以上前からあったのだそうだ。立ち消えにはなったがダムを建設する話が出た際に周辺地域の「観光をどうするか」という問題がクローズアップされたことや、地震で震動の滝への道が崩落し、観光客が近づけなくなったこともあって、声は熱を帯びていく。

生田さんによれば、九重町では昔から地域や集落での自律的な活動が活発だったそうで、酒を酌み交わしながら「地域をどうするか」について熱く議論が交わされる際に、橋のプランも語られた。「1992年から2017年、7期町長を務めた坂本前町長はそうした席にも顔を出していましたから、耳に入っていたはずです」。

話が具体化したのは、1993年、九重町第二次総合計画で「滞在型」「通年型」の観光リゾート作りを推進する方針が定められ、翌年「大吊橋」「スキー場」「ゴルフ場」が観光の再生・創造の中心的テーマになってからだ。当時も九重町にとって観光は大きな産業で、年間500万～600万人の来訪者があった。しかし宿などに滞在する客は1割にも満たなかったという。

スキー場は民間主導で1996年に早くも実現したが、町の庁舎や町民グラウンド建設を優先してその後となった吊橋は大きな壁に直面する。国を挙げて進められた「平成の大合併」だ。九重町では大吊橋、県から合併の相手とされた玖珠町では運動公園整備。どちらも大型事業を抱え、必要とするものが異なるために合併協議会で一致を見ることができなかった。

元々は合併を考えていた坂本町長は単独で自律の町づくりを進める決意を固め、民意を問うため辞任して出直し選挙に打って出る。信任を得て吊橋建設は動き始めたものの、今度は当てにしていた公的な資金調達制度が利用できない事態に陥った。ところが何が幸いするかわからないもので、これが吊橋への関心と知名

度を前もって高める結果になったという。真相はともかく「公的資金の利用拒否は合併を拒んだペナルティではないか」と大いにニュースをにぎわしたからだ。

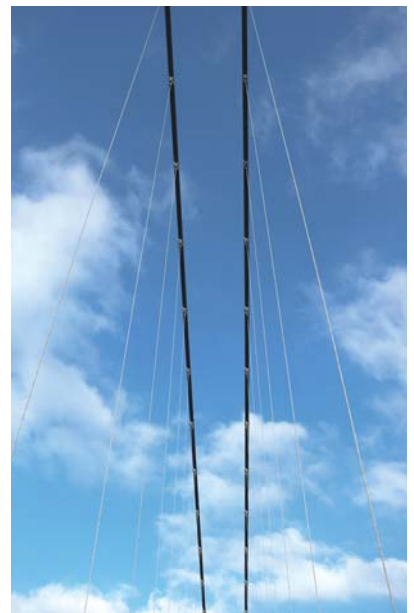
橋がもたらした恩恵と 今後への課題とは

別の資金調達制度を利用して、ようやくオープンへ。数年は紅葉時期になると大渋滞が発生し、地元の人たちの移動もままならない事態も発生したが、大成功のおかげで資金も返済しつつ、町には潤沢な入場料収入がもたらされた。この収入で町には通信用の光ファイバーが敷設され、未就学児の医療費の無料化や小中学生の医療費補助などが実現。橋の警備などに100人に及ぶ雇用が生まれ、売店で売る食べ物や土産物に地元の農産物が使われている。佐世保バーガーを名物とする姉妹都市、佐世保に倣って開発した九重“夢”バーガーも人気だ。

また、大吊橋ができたおかげで、周辺の著名温泉地を含めた広域レベルで活性化がはかられ、「オープン当初は周囲から感謝の言葉をたくさんいただきました」と生田さんはいふ。しかし、課題も残されている。実は町内の温泉を九重“夢”温泉郷と名付けてPRはしているものの、当初の目的だった肝心の宿泊が伸びていないのだという。

周辺と一体となったおかげで、休憩・立ち寄り地として人気を保たれている側面はあるが、引き続き大吊橋の存在を地元への宿泊に繋げる方策や四季のイベント企画のほか、例えば震動の滝への散策路を整備する案など、明日を拓くためのさらなる取り組みが求められている。とかく紅葉の時期ばかりがクローズアップされがちな九重“夢”大吊橋だが、橋から見える風景には四季折々の美しさがあり、繰り返し訪れるファンもいる。

いまだ秘められた魅力と潜在的な可能性をいかに拓いていくかが、今後への鍵といえるだろう。



直径53mmのワイヤー7本を束ねたメインケーブル。2.5m間隔で吊索が伸びる



メインケーブル設置の様子。工事開始は2004年6月、完成は2006年10月



高さは今も日本一。シーズンオフも観光客はひきもきらず、外国人客も多い



九重森林公園スキー場は10ha、5本のスキーコースを擁し、九州最大規模を誇る

取材・写真協力／九重町「九重“夢”大吊橋」管理センター